

\*2011年3月11日。大地震発生。家屋が倒壊、津波が襲う。翌日12日福島第一原発事故による放射能拡散。多くの人が茨城、東京方面一帯に逃げました。3月13日(日)の礼拝は5人でした。しかし、礼拝ができない教会が数多くありました。私たちもいつ避難しようかと思っていましたが、ある日のこと、私と家内はイエス様の声を聞いたのです。「わたしはこれから原発のところに行き、終息するように祈る。そして、弱い人たちや病気の人の世話をする。その人たちに寄り添い、共に生きるのだ。それなのにあなたはわたしを見捨てて逃げ出そうとするのか」私たちはここに留まる決心をしました。これが私たちの支援活動の原点です。

支援物資の運搬や供給、炊き出しから始まり、借り上げ住宅ができてからは、カフェやコンサート、映画会などを行うようになり、多くのボランティアが来てくださり、今も続けています。心から感謝します。

\*教会は4~50センチ冠水しましたが、幸い床上浸水は免れました。しかし、教会の近くの海岸の集落は堤防が決壊し、200戸ほどの家は流され全壊しました。教会員や近所の方々、仮設住宅や借り上げ住宅の方から多くの悲しい話を聞きました。ここ1~2年は原発のことを話してくれるようになりました。原発は生活面では随分助かったけれども、この様な事故が起きてしまうとやはりないほうが良かったのだと思います。借り上げ住宅などは2017年3月で一応閉鎖されることになっています。多くの人と親しくなったのにそのコミュニティが壊されてしまう。不安と恐怖心で自死する方が増えるのではと心配されます。

そのような不安と心配と悲しみの中に暮れている状況が聖書の中にもたくさんあり、イエス様はこのような人々を助けなさいと言っています。そして、イエス様ご自身が実践されたのです。「**喜ぶものといっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。**」(ローマ12:15) 私たち教会・クリスチャンが被災地で求められているのはこのことではないでしょうか。「傾聴」とはただ聴くということではなく、その人のことを理解し、受け入れることです。宣教は、このことが入口となります。

\*被災地で出会った多くの人たちが言います。「何で私の人生でこのような大きな出来事が起こったのか。こんな地震さえなかったら、故郷で幸せな日々を過ごし、安らかな死を迎えられたのに。」しかし、「なぜ」のところから、「神様はすべてのことをご存知であり、計画があるのだ、そして、全てのことは神が相働きて益としてくださるのだ」というところに辿りつくことです。これは容易なことではないですが、「**そればかりでなく、艱難さえも喜んでいきます。それは、艱難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。**」(ローマ5:3~4)と聖書にあるように、全ての出来事には意味があり、様々な試練、逆境、苦難も、忍耐を培い、キリストにある希望を生み出すことができます。このことを人々に知らしめていかなければなりません。

\*大震災は多くの人がキリストと出会うことができるための神様の計画であったのだと思います。その計画の実現のためには、私たちは地域の人々とともに喜び、共に泣くものでありたい。人々と「共に生きる」ことが優先されるのです。